

## 序

東京都渋谷区の肺がん検診で胸部X線写真の読影にたずさわって今年で20年になる。中野区の読影会も10年になった。読影会でいつも思うのは、胸部X線写真の奥深さ、読影指導の難しさ、である。最近では若手医師と一緒に読影する機会が増えたが、時間をかけてひとつおりの読影方法を解説したあとでも、「見えてほしい陰影」はなかなか見えるようになってくれない。また、たとえば「左の主気管支を指して」と言ってもなかなか正確には指してもらえない。「こんなに見えていないのか」と驚くことはしばしばである。しかし考えてみれば、系統的・理論的に読影方法を教えていなければ、またその繰り返し学習を行っていなければ、読めないのも無理はない。問題は、この奥深い胸部写真読影法を「いかに教えるか」にあるのだと気がついてきた。

ではどうやって教えればよいか。一定の順序で、理論的に、胸部X線写真の重要なポイントをひとつおりの追える読み方である。長らく考えているうちによろしく「人のはい（人の肺）読影法」なるものを考えついた。まずは「人」の字になっている太い気管支の流れと肺門部をみる。「の」の字で縦隔陰影を追う。「ハ」の字で肺尖部の左右差をみる。「い」の字で肺野を左右比べながら読影する。ついでに側面像も「の」の字でみる。語呂もよく、教えやすく学びやすいはずだ。目を動かす順序を決めれば正常構造物を把握しやすくなり、異常構造物も見逃しにくくなる。

本書前半の基本編では主に「人のはい」読影法について述べた。後半の実践編では、さまざまな呼吸器症状を呈するさまざまな疾患の症例をとりあげた。疾患に関して必要と思われる知識は解説以外にMemoとしても記した。また、各症例の初診時の胸部X線写真が著者の目にはどの

ように見えているのか，できるだけ忠実に示すために手書きの図でこれを示した。じっくりと症例を味わって，呼吸器病学の面白さ・奥深さを知っていただきたいと思う。

なお，実践編でとりあげた症例は，「レジデントノート」内の「実践！ 画像診断Q&A-このサインを見落とすな」にて掲載したものである。今後もさまざまな症例を取り上げていきたいと考えており，成書として続刊もまとめる予定である。

最後に，筆の遅い私に根気よくつきあってくださった羊土社編集部の皆様に感謝申し上げたい。本書が胸部X線写真の読影を学ぶすべての方々に，少しでも役に立つことができれば幸いである。

2010年 5 月

山口哲生